

研究成果情報	農産	17	稲	農業気象
新技術・情報名	平成3年の福岡県における水稲の台風被害の実態			分類 ②

1 成果の内容

1) 技術、情報の内容及び特徴

平成3年度の水稲の作柄は作況指数72と戦後最低であった。この主要因は台風17号と19号及び移植後～8月上旬の日照不足と考えられる。そこで、県下における地域及び品種別の被害程度と気象要因を明らかにした。

(1) 地域別被害の実態

晩生種～中生種の作付が多く、風が強かった筑後平野での被害が大きかったが、中でも潮風害があった有明海沿岸の大川、柳川、山門の被害が最も大きく、次いで周辺の大木、三瀬、高田の被害が大きかった。その他の筑後地域の収量の平地は55～80%で、筑紫野平野以北の59市町村は80%以上であった。玄米の品質に対する被害も収量に対する被害と同様に筑後地域で大きかった。

(2) 品種別作柄に関与した気象要因と度合

極早生～早生種の台風被害は少なく、生育前半の日照不足の影響が大きかった。中生種は各気象要因が複合的に関与していた。晩生種は台風17号の影響が最も大きく関与し、また、10月に入りほとんど降雨が無く晴天が続いたが、中～晩生種で落水期が早かった水田では田面が白乾し、後半の登熟に悪影響を及ぼした。

2) 技術、情報の適用効果

気象被害軽減のための参考となる。
戦後最低の作況となった台風被害の記録を残す。

3) 適用範囲

県下全域

4) 成果の利活用・普及指導上の留意点（今後の問題点も含む）

平成3年度水稲の作柄不良は、台風だけの被害ではなく、移植後の日照不足や登熟期の乾燥等が複合されていた。技術対策としては、台風襲来時の深水管理、間断かんがいの励行及び落水時期の適正化等の基本技術が重要である。

2 具体的データ

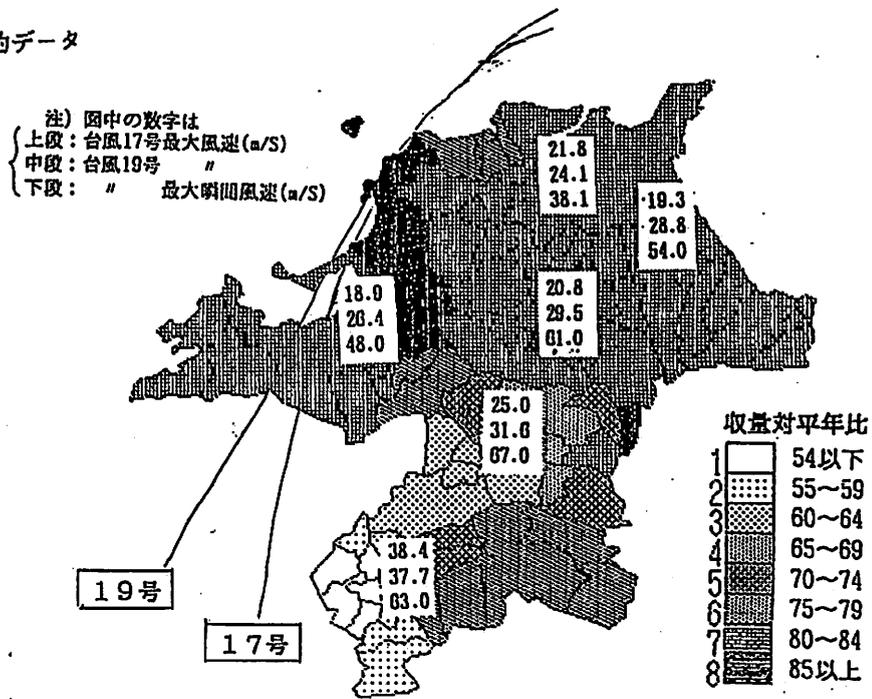


図1 台風の地域別最大風速と市町村別収量の平年比

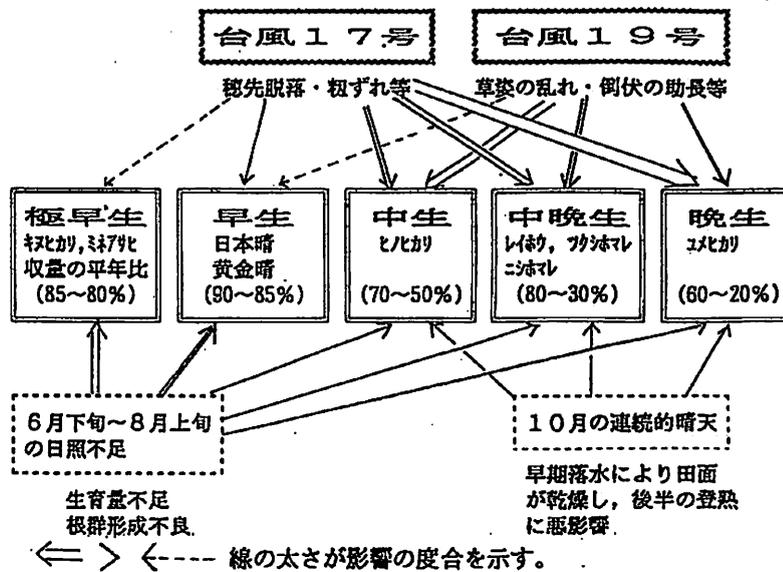


図2 平成3年の水稲作柄に関する気象要因とその度合

3. その他特記事項

担当部科室名: 農産研究所 育種部 作物品種研究室

研究担当者名: 原田皓二・大隈光善・田中浩平

研究課題名: 水稲作況試験

期 間: 平成3年

予算区分: 経常

既発表論文・資料名等: 平成3年度福岡県農業総合試験場 作物部会 互作試験成績概要書

取りまとめ責任者名: 大隈光善